

お正信偈拝読 その三「阿弥陀如来の果位の証果」

ご讃題 あまねく無量・無辺光、無碍・無対・光炎王、清浄・歡喜・智慧光、不断・難思・無称光、超日月光を放ちて塵刹(じんせつ)を照らす。一切の群生、光照を蒙(かぶ)る

(Ref:行巻「正信偈」註釈版聖典 P203)

一、はじめに

「普放無量無辺光」から「超日月光」までは、「阿弥陀如来の果徳」を「十二光」で讃えられた一節です。それ故、例えば、無量光仏等と仏の字を添えて称すればそのまま阿弥陀如来の別名にもなるのであります。

十二光で讃えられたその故は、無量寿仏の威神光明は、最尊第一で諸仏の光明の及ぶところではないからです(Ref『大経』註釈版 P29)。

本願叶って阿弥陀如来にお成り遊ばしたということは第十八願文に誓われたお名号が完成されたということになりますから、それはそのまま仕上って下さった「お名号のお徳」を讃えた御文となるのであります。

大経に「無量寿仏の光明は、十方諸仏の国土を照耀したまふに、聞こえざることなし」(Ref『大経』(上)P30) とあるのは、光明の利益がそのままお名号の功德であることを示した証拠のご文であります。

ところで、十二光は大経の異本である『無量寿如来会』では、十四光として、『サンスクリット本』では、十九光としてお讃えになっていることが知られますので十二の数に捉われることはないといわれております。

阿弥陀如来の光明のお徳についてのご開山のご著書としては『ご本典真仏土文類』の曇鸞大師の『讃阿弥陀仏偈』(Ref 註釈版 P361)と憬興

(きょうごう)師の『述文賛』(Ref 註釈版 P370)の引文二種の他八十八歳で著された『弥陀如来名号徳』(Ref 註釈版 P727)を挙げるができます。

しかし、蓮如上人の『正信偈大意』はいかにもコンパクトにまとめられていることが判ります。これを拝読するにつけ今更ながらに上人のご苦勞を偲ぶことができます。それ故、ここでは、主に正信偈大意に沿ってそのお徳を頂戴してみたいと存じます。

二、阿弥陀如来の果徳(お名号のお徳)

「無量光仏」というのは、名号の利益が限りなく長く、過去・現在・未来に亘って量的に限りがないことを意味しています(Ref 註釈版 P1024)。

これは、大経の第十三願文の寿命無量の願に対応しており、いついつまでも働き続ける寿命無量のお徳によってあらゆる衆生がお救いに与ることが示されているのであります。寿命無量のお徳により、今も現に働き通しに働いていて下さるのであります。

「無辺光仏」というのは、光明が照らす働き「照用(しょうゆう)」の広大なお徳を表したものであって、十方世界を尽くして辺際がなく、いかなるものも阿弥陀如来の光明によって照らされる縁を戴いているというのであります(Ref 註釈版 P1024)。

「無碍光仏」というのは、はかりしれない光明の何ものも障害としない有様を表しています。人間であろうと山河草木であろうとこれを遮ることができないからであります(Ref 註釈版 P1024)。

「碍(げ=さわり)」には山河大地雲霧等の外障(がいしょう)と私の貪欲(とんよく)・瞋恚(しんに)・愚痴・憍慢(きょうまん)等の内障(ないしょう)の二障がありますが、無碍光だからその力によってこれら二障には決して遮られることがありません。それ故、天親菩薩は「尽十方無碍光如

来」とそのお徳をたたえられたのです。

・「無辺光仏」と「無碍光仏」とは、その意味内容からして第十二願の光明無量の願に対応するものと考えられます。

・その働きの中でも内障を打ち破る智慧の光の働きによって私のしづとい自我の殻が打ち破られ、如来様のまことのお心が私という器に飛び込んで下さるのだと頂戴することができます。

「無対光仏」というのは、光としてこれに並ぶべきものはなく、もろもろの菩薩のとて及ぶところではありません(Ref 註釈版 P1024)。

「光炎王仏」というのは、火が薪を焼き尽くさないということがないように(Ref 大経(下))、光明の智慧の火が煩惱の薪を焼き尽くさないことがあります。迷いの闇の世界に住む衆生も光照を被って解脱を得ることができるのはこの光の利益によるのであります(Ref 註釈版 P1024～5)。

「清浄光仏」というのは、法蔵菩薩のご修行中の有様が**無貪(むとん)**であったことに基づいて生じたお徳であります。それ故、この光のお徳を以て衆生の貪欲の煩惱の病を治癒させるのであります(Ref 註釈版 P1025)。

「歡喜光仏」というのは、法蔵菩薩のご修行中の有様が**無瞋(むしん)**であったことに基づいて生じたお徳であります。それ故、この光のお徳を以て衆生の瞋恚(しんに = 怒り)を滅するのであります(Ref 註釈版 P1025)。

「智慧光仏」というのは、法蔵菩薩のご修行中の有様が**無痴(むち)**であったことに基づいて生じたお徳であります。それ故、この光のお徳を以て衆生の愚痴という無明の闇を破るのであります(Ref 註釈版 P1025)。

「不断光仏」というのは、光明が**途絶えることがない**ことを示しています。過去・現在・未来に亘って永久に途絶えることなく照らし続けていて下さるからであります(Ref 註釈版 P1025)。

「難思光仏」というのは、ここをもつて図ることができない光明のお徳を表しています(Ref 註釈版 P1025)。それ故、また、「不可思議光(仏)」と言われるのであります(Ref 『無量寿如来会』(上))。

「無称光仏」というのは、言葉を以てはかることができない光明のお徳を表しています(Ref 註釈版 P1025)。それ故、また、「不可称量光(仏)」とも言われるのであります(Ref 『無量寿如来会』(上))。

「超日月光仏」というのは、日月の照らす範囲は自ずから限界があるのに対して仏光はあまねく八方上下を照らして障碍するところがないからこれを日月を超えと言われるのであります(Ref 註釈版 P1025)。

・こういう次第だから、阿弥陀仏はこの十二光を放って、塵の数ほどもある世界(十方微塵世界)を照らして衆生を利益して下さるのです(Ref 註釈版 P1025)。

・「一切群生蒙光照」というのは、あらゆる衆生は、宿善によりみな光照の益に与り奉るというお心を表したものであります(Ref 註釈版 P1026)。

・仏説無量寿経には「十二光に遇(もうあ)うものは、三毒の煩惱が消滅し、身心が柔軟になり、歡喜踊躍(かんぎゆやく)して自ずから善い心が生ずるのであり、三悪道の苦に責め苛まれているときにこの光明を見奉ると

第一に、ただちに苦しみが休止して苦悩がなくなるばかりか、第二に、その迷いの寿命が尽きると次の世ではみな解脱を得ることができる」と示されているのであります(Ref 『大経』(上)P30)。

なんとありがたいことでありましょうや。合掌

正覚寺仏教壮年会例会	毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会	毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)	
〒五二〇 〇五〇 一大津市北小松四五二番地 ☎& Fax 〇七七 五九六 〇一六六	
☎-ℓ・mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥	